京都大学新聞
学生団体 京都大学新聞社
京都市左京区吉田 京都大学構内
京都㊥8111（学内142甲）
振替・京都3909
（1部10円）

社告
▽本紙は、八月休暇中は二十三日号、三十日号の合併で終りますが、九月より従来通り旬周発行致します。
▽次号は九月六日発行です。

日韓・ベトナムにむけて 注目される府学連

9・17、18に大会 足並み揃わぬ各派

七月十七日、十八日行なわれる予定の府学連大会が主流を占めるフロント=構改派の動揺から九月に延期されたが、今月末になってもまだ社学同を中心とする反代々木各派とフロントとの間で、大会方針、日程などの重要な課題の決定がなされておらず、秋の京都における学生戦線は東京における高まりとは反対に、まだまだ混迷を脱することはむつかしいといえよう。しかしフロントが民青=統一派と融合することは民青第二府学連の動きもあり、現時点では不可能であり、九月十七、八日頃に府学連大会が予定されており少なくともその頃までには府学連の活動も決定されるであろう。

府学連がこのように動揺したのは民青=統一派の京大における勝利、それの背景として、東南アジア情勢の変化、原潜寄港等である程度反米意識が大衆化したとも言えようが、やはり反代々木各派の分派抗争と、組織の弱体、ラジカルな街頭戦術にのみ依拠した運動方針などにその主体的理論的欠陥を求めるべきであろう。

これに対して社学同などは京大における六月選挙の敗北は東南アジア情勢の転換に伴う反米闘争、民青=統一派のブルジョア民主主義をスローガンとしたマヌーバー（学内民主化、あらゆる要求）社共一日統一戦線の成功などが一般学生大衆にうけたものとしてとらえ、その主体的欠陥は新左翼の全国的統一戦線の失敗（全学連再建は二年越しの課題であった）による大衆性の欠如、第三理論と国際階級闘争の理論的な不備による労働者戦線への組織拡大の伸び悩みなどを上げている。また一般学生大衆の主体的な状況の変質を重要視し、大衆闘争が原則であり、それをいかにラジカルな反体制意識にまで次元を高めてゆくか、またその点の分析、戦術の誤りが府学連の京大における新左翼の動揺である（革マル）とみるものもある。

しかしここで重要な位置を占めるのは立命大を中心とするフロントの動きである。フロントの思想次元における位置は大衆闘争のみが中心にされているので府学連問題にしても、民青の第二府学連に対して働きかけて、あっさり拒絶されたり、都学連に対しても分裂を固定化するものとして両方とも支持しない立場をとっていることからその非理論性は覆いがたい混乱を呈している。しかしながら府学連主流を占めるフロントが新左翼に対して共闘を組みながらも思想的拒絶を露にし、戦術では急進的ラジカリズムさえも否定している現在、府学連の政治的展望は依然として困難である。それにしても新左翼=社学同、革マルなどの府学連に対して九月からのとり組みが遅れている。日韓ベトナムが緊迫しつづけている今日、青行委などの市民運動の一定の高まり、大衆の危機意識と国際経済の流動化が起りつつある時、あくまで大衆闘争が階級闘争においても原則であることの重要さを認識し、実践過程での理論強化、組織拡大が現在最も求められていることを再認識して、府学連はただちに活動を開始しなければならない。フロントが主張する組織論原則において、京大旧同学会の不正問題は民青のマヌーバーによる誤解もあり三カ月で三百万円使用は虚報である。同学会の毎年二百万円余りの赤字の繰り越しを故意に無視した卑劣な中傷である。この点旧同学会執行部の表明が必要とされている。

日韓条約の国会批准は十月五日から始まる臨時国会で行なわれる。また原潜寄港、ベトナム戦争の拡大など内外の情勢は増々緊迫している。この時反戦闘争を伝統とした学生戦線、京都においては府学連に課せられた任務は大きい。それだけに六・四闘争の盛り上りを継続して、大衆闘争から反体制へとより高次元の闘争が求められるが、現時点における大衆闘争は反戦、反帝、反独占闘争において、この分裂を克服してゆくことが必要であろう。そして実践過程での思想的高揚がこの混迷を脱する唯一の道である。それは十月から十一月にかけて全国的に最高点に達すると思える学生、労働運動の中で、全国統一行動、ゼネスト等が提起されるであろうが以上の実践過程を確実に踏んでゆかねばまた分裂抗争の浮目をみるであろう。

全学連再建に活発な動き
—休暇中の各潮流—

七、八月の休暇に入り、混迷する学生戦線は韓国、ベトナム、国内情勢の流動化を迎え活発に全学連の動きを見せた。指導組織の強化、統一の軸として、安保後の分裂を止揚とする新左翼は安保闘争の総括を中心とする思想的、理論的確立をめざすことに重点を置くが既成政党の指導や大衆主義者に指導権を握られている現時点での大衆闘争にどう自己の論理や戦術を組み入れてゆくかという点での具体的な戦略が打ち出せていないのが実状と言えよう。

しかし一方では大衆闘争を重視するあまり、新左翼をハネ上りときめつける構改派、民学同は相変わらず大衆マヌーバーの組織論しか出しえない状況にある。民青全学連の偽瞞はさて置いてもこれらの組織がこの緊迫した間何も為し得ず、集会さえもほとんど持ちえなかったことが右の事を如実に示している。

七月八日、九日三派連合による都学連再建大会、十日、十一日は民青自治会による都学連結成大会、九日～十二日は革マルの全学連大会、二十三～二十五日の民青全学連大会三十一日には社学同全国大会での関西派、ML派の統一一方マル同=中核派による全国活動者会議、八月一日全国労学総決起集会、六日、革マル派国際反戦集会八日関西集会等々各潮流は夫々の情勢分析、経済分析、日韓、ベトナム体勢を打ち出す中で安保以後の分裂をどのように綜括するか、どのように克服してゆくかが主な課題となった。そして第三潮流による新たな運動理論の欠如と客観情勢の変化が分裂の原因であり、この克服と日韓、ベトナムは世界資本主義の中で日本帝国主義の膨張政策に対して明確な反体制闘争に向わねばならない（社学同）、また大衆の意識状況の把握の欠如、小ブル急進性が分裂の原因として、大衆闘争とラジカリズムとの結合（革マル）が強調された。その具体的な問題として、日韓、ベトナム、教育反動政策、企業合理化等があるが、これらと現実活動の中でどのように克服し、意識を高めた大衆をラジカルな運動にまで次元を高めてゆくか今秋のこれら指導組織の闘いと忍耐強い分派活動との闘いいかんにかかっているといえよう。

大学院 助手待遇など考慮
旧七帝大系学長会議ひらく

八月十四、十五の両日にわたって京大で旧七帝大の東大、京大など国立七大学の学長会議がひらかれ、大学院制度に関しての問題が話しあわれた。この会議は全学部大学院を持つこれら大学の特殊問題について情報交換と話し合を行うためひらかれたもので、文部省大学局長、各大学事務局長も出席した。文部省が大学院設置基準を作成しようとしているため大学当局としての問題や意向は次のようである。

①工学部など修士課程が実質的に専門課程であり定員をはるかに上廻るものを採用しており、文科系でも博士課程へは研究に進むので定員制は無意味であり、現在、内部で運用している②修士課程二年、博士課程三年であるが、あわせて博士課程を五年として制度化してもよい③助手不足で、院生の奨学金の不備などを補うため学院生を助手に採用する④大学院独自の予算を作る外、建物、事務系統を独立させる⑤奨学金の増額など。

会議はいままで国大協内でもたれていたが、これらの大学にのみ共通する問題（教養部、大学院制度、名誉官位など）を話し合う定期会議として設けられた。今年は大学設置基準作成や、院生の生活問題をめぐっての動きなどに対応して、大学院問題がとり上げられた。毎年一回の定期会議を行う予定。

大学院の目的などについて今後論議される。現在、大学院は学部講座として独立していないため、教官が多忙で助教授、助手が不足していること、工学部を中心として定員が増えているので施設、予算、事務など独立した形で拡充される必要があること、研究に専念できるような奨学金制度がないことなど多くの問題を抱えている。

これらの問題について、京大院生によりなされた院生白書を始め、最近では阪大院生を中心として研究、改善運動が行なわれ注目されている。

佐々木惣一氏 京大名誉教授 逝去

京大法学部名誉教授佐々木惣一

氏（㊇）は八月四日老衰のため、下鴨泉川町の自宅で死去された。佐々木教授は明治三十六年京大法学部を卒業、明治三十九年助教授、大正二年教授となったが、昭和八年滝川事件で、現立命館大総長末川博氏らと共に退官した。その間法学部長二回、本社の初代顧問も歴任。

昭和九年立命大学長、昭和二十年京大名誉教授、昭和二十八年湯川教授と共に京都名誉市民となる。八月二十一日京都会館において市民葬が行われた。

氏は東大美濃部達吉教授と並んだ憲法学の権威で、京大を中心として大きな影響を与えた。新憲法に関しても佐々木私案を作成するなど、憲法学上に多くの功績を残されている。

9，1闘争を呼びかける 京都青年行動委員会

毎日曜日高島屋前で反ベトナム戦争、反日韓条約を呼びかけて座り込みを続けている青年行動委員会は、市民の自主的な運動として、青年労働者、学者、学生、文化人から序々にその新しい運動形態が注目されている。

今まで青行委は、九月一日を「日韓批准阻止、ベトナム戦争反対市民総決起の日」として九・一デモを呼びかけている。

現在各地で京都青行委と同様の座り込みが始められているが、京都では五月三日以来、既成指導組織にとらわれない、市民の自主的な、即時的な行動形態をとって四カ月の間高島屋前に座り込みを続け、七月には学生、一般労働者の参加、外人留学生なども参加し、規模も大きくなって常に五十人ぐらいは参加する様になってきた。

官憲の弾圧もようやく厳しくなり六月二十日逐に六人の労働者、学生を逮捕し、八月二十五日には野村助教授（教養独）を含む六人を逮捕し、道交法違反で排除する行為にでている。日韓条約もおしづめを迎え弾圧は苛烈になることが予想される。

学生の多くが帰京していないので動員力は弱いものであろう。またこの日は、新しいデモ行進をする予定。先頭はロープを体に巻いたロープデモ、中央はゼッケンデモ、後は自由参加デモの三隊に分ける。ロープで体を巻くのは「縛られた若者の怒り」を表すそうだ。

青行委の方向が自由参加の運動であり、従来の民主主義危機を叫ばれた時にのみ大衆動員をした市民運動に、反戦運動だけではなく反戦争政策の方向性を与えたことは意義がある。また四分五裂している既成指導組織に刺激を与えるある程度の有効性を持ち得たことも認められる。しかしこの運動が反体制運動とは一線を確すのは明らかでありそうなるにはこの運動の弾力的な活動と理論強化、組織化が実践を通じて行われてゆくかどうかにかかっているだろう。

六・一五 有罪判決下る
北小路敏被告らに

三十五年六月、安保改正阻止のため国会構内で抗議集会を開こうとした全学連学生とこれを阻もうと襲いかかった警官隊が激突、樺美智子の死などを起した「六・一五事件」に対する判決公判が去る九日開かれ北小路敏当時全学連委員長代理（京大）ら二十三被告に有罪の判決を下した。「六・一五事件」は多くの反対市民の声の中を「声なき声」を聞くといって日米新安保条約を強行採択しようとした当時の岸内閣の暴挙に対し、全学連学生らが国会構内で抗議集会開こうとして衆院南通用門付近で警官隊と衝突したものである。これに対し、検察側は「神聖な国会を暴力で占拠した」として、公務執行妨害、傷害、建造物侵入などで起訴した。東京地裁刑事五部で開かれた同公判で、山田鷹之助裁判長は北小路被告に懲役一年六月、執行猶予三年のほか全被告二十三人に懲役一年六月から六月、全員執行猶予二～三年をいい渡した。

教育学部など 増改築進む

八月末から当初予算を認められていた教育学部第二期工事、薬学部増築工事、教養中央館改築工事などが着工されると共に、学生部移転、生協地下食堂改修なども既に行われており構内の様子がまた一段と変貌する。

教育学部は事務室、臨床実験室などを含む鉄筋四階、地下一階の校舎が図書館前に来年三月には完成する。薬学部も西寮の北に増築工事に着工したが、実験室、講義室などが充実される中央館（木造二階建）は現在取壊中だが、教養部構内の長期計画に従ってB号館（鉄筋四階建）が建築されるが、教室、実験室（心理学）研究室が含まれる。これは来年度からの定員増に備えるためである。

490円 新企画 第 号 のフルコース
スープ、フィッシュ、アントル、野菜サラダ、デザート、パンそしてコーヒー
L'ambre
名曲の調べ……静かなムード
語らいと憩いは地下喫茶部へ
●あらゆるご集会、コンパ、ご招待に是非ご利用下さい。ご予約を承っております。
名曲レストラン
□百万遍らんぶる へもどうぞ
らんぶる くまの店
京・クマノ交叉点下ル 電㊥4251

学生戦線はあきらかに客観的悪状況の下に、その分断された醜態を露呈しつつも、しかしながら一方で日共=民青の一定的伸張を許している現在、学生一般学生大衆と活動家=指導部とのかい離は決定的なものとなっている。京大においては、形式民主主義の即自的認識に便乗した形での民青の同学会、生協総代の奪権という結果的現象を表出させてはいるが、旧主流派との勢力括抗の二重権力状態が闘いを一層の困難な状況に追いやっている。この間の京大における闘いをふまえながら秋からの闘いの戦線の強化を図りつつ、活動家=指導部と一般学生との対話を追求することが現在的に要求されている学生戦線の任務である。

大衆の状況把握
—分裂を止揚する新左翼の課題—

安保闘争以降、四分五裂の戦線での苦闘を体験しながらも、全国学生運動の先頭に立ってその指導的地位を一貫して保持してきた京都府学連の、今夏の七月十七、十八の府学連大会流会に見る混迷の状況は、一方で民青=京都学協のセクト主義と、他方民学同、フロント系の構改派の日和見主義、一見妥協的ポーズによる党派的利益の追求の上に立つものであり、九月民青による第二京都府学連の発足も予想される現時点では日韓条約国会批准阻止闘争に向けての運動の客観的条件は更に困難なものとなり、京都における先進的闘争は組み得ない事態も予想される。首都における参院選挙、都議会解散および都議選挙に見られた流動化した状況は、今また日韓—ベトナム問題闘争へ、無形の一般大衆への余韻を与えることによって更に流動化するであろう客観的条件を与えるものである。首都と京都とを結ぶ戦線の分析は（首都における大衆意識の昂揚と京都での沈滞）過去の闘争を顧みれば察せられるように、闘いの力を著しく弱めるであろう。即ち全国的統一指導部としては、昨年十二月に「再建された」民青「全学連」が存在するが、首都では行なわないという闘争形態の相違からもうかがわれるように、統一指導部として機能し得ないだろうし、首都におけるこの闘いの有利な条件をいかに活用できるかという点などで、疑問がある。

七、八月の首都におけるさまざまな潮流の集会や大会は、深まりゆく学生戦線の分裂の深さを自ら現出させているものであると同時に、戦線そのものの苦悩を表象していると見ることができる。ここに見られるのは大きく分けて二つの潮流—日共=代々木系と反代々木系—の二極分解現象であり、一方反代々木系における全学連派（マル学同=革マル派）と三派連合系（社青同・マル学同=中核派・社学同二派）との分裂状況である。今にはじまったことではないこの分裂の現状は一般に一方で民青=日共の学生戦線の分断、政治的引きまわしによる運動の分裂の固定化を導くところの諸種の条件を生ぜしめる根本的要因となってましているし、他方、反スターリニズムを世界革命戦略とするマル学同と反帝を標榜する社青同、社学同との分裂は戦線の混迷を一層複雑なものとし、加えて構改派の動向が益々それを押し進めている状況にある。

七月八日、九日の御茶の水の全電通会館で開かれた三派連合系による都学連再建大会は再建十四回大会として、十月全学連再建準備委員会から提出された総括、情勢分析、任務行動方針の一括採択、人事決定を行なって再建を宣言した。

七月十日、十一日には世田谷区民館で民青系自治会による都学連結成大会を開き、都学連結成準備委員会からの基調報告、規約、財政についての提案を採択、結成宣言を行ない、役員選出して大会を終了した。

七月九日、十日、十一日、十二日には川崎労働会館と早大で革マル派による全学連大会が行なわれ、民青系、三派連合系自治会運動との対決の姿勢をあきらかにした。

七月三十一日、千駄ケ谷区民講堂において社会主義学生同盟再建全国大会が開かれ、関西社学同と東京社学同（ML派）の組織的合同が図られた。

七月三十一日 東京工業大学において マル学同=中核派の全国活動者会議が開かれた。

八月一日 丸段会館において全国労働者学生総決起集会が行なわれた。

八月六日 赤坂公会堂において革マル派による国際反戦集会が開かれた。

右に見られるような首都におけるさまざまな集会と大会とが、現に極東における戦争基地として、中枢的位置を占める日本の現在的危機をいかに超越し得るかという問題解決を、果して物質化し得るかどうかということは、更に時を待たねばならない。当面九月以降における日韓条約批准阻止闘争をどの部分が指導し得るかということが一つのメルクマールとなるであろう。さまざまな潮流の現時点における闘争目標が同一でありながら、同じ時に潮流数だけの集会や統一行動が持たれるという愚は犯されることはないにしろ、六・九国民統一行動に見られたような喜劇は二度とくり返してはならない。今ここで民青の無能力さとその欺瞞的姿勢を指摘することは可能であるにしても、他方〝闘う翼〟としての反代々木系諸派の闘争においては当然にも民青伸長=反代々木系の後退という悪条件の中で、全国的統一指導を貫徹し得るか否かがその真価を問うことになるであろう。現在的に、状況から要請される学生戦線の任務は、まさに戦線の統一化でなければならないし、過去何度か流産のうきめにあってきた反帝全学連の再建を指向することでなければならない。それはまさしく大衆闘争の次元での指導方針の貫徹が可能とされた部分が担うのであり、そして過去の例から類推しても、首都と京都における戦線統一こそが全国的学生運動の要となったのであった。しかしながらこれは断じて民青によってはなされ得はしないだろう。何故ならば彼らにおける醜悪なまでの思想絶対化への排跪=思想の物神崇拝は、思想の頽廃以外の何ものももたらさないし、自己のみがマルクス主義の領域を独占する権利があり他の者は修正主義者であり、トロツキストであるとするセクト主義からは、決して一般学生大衆を真実に把握する柔軟な思惟と方針は生まれ得ないからである。民青を乗りこえる闘いは過去にも追求されてはいるが今また、京都における学生戦線の危機的状況を加味しつつ、更にそれまでの闘いの限界と誤謬を徹底的に暴き出すことなしに減退していく悪習を粋砕しながら、闘いを追求して行かねばならない。ここにおける指導部と一般学生大衆との位置関係の構造的把握が同時に必要となってくる。

首都におけるさまざまな潮流の大会や集会が、それなりの運動論と組織論等を語りながら、それ自身の自己展開を試みようとしている事が理解される。しかしながらいわば学生戦線の外部状況から要請される戦線の統一に対して、内部における統一化への志向がその要請に対応する際のさまざまな軌轍の中で空転しつつある現状を直視しなければならず、かかる観点からの首都におけるさまざまな大会や集会の意義をとらえ返すことが、一方では指導部と一般学生大衆との位置関係の構造的把握が可能となる根拠となるであろう。

安保・三池の二大闘争をくぐり抜けることによって分裂し、分裂している革命的左翼の現在的任務が前衛党組織論に集約されるかどうか、そしてまた理論と実践との関係の新たな追求にあるのかどうかを問うのは措くことにして、特に安保闘争を通じて革命的環の主部を形成しその後尚かつその責を担うべき全学連の地位を位置ずけられながら、しかしほかから分裂の現状を許し得ている主体的欠陥を明確に暴き出すことを学生戦線における個的主体的任務と規定し、他方一般学生大衆意識=大衆的状況の把握が必須とされる由縁を徹底的に検討することは、安保以後の学生戦線の分裂を止揚するための方法論と決して矛盾するものではない。

首都におけるこの間の各種大会が、それなりの自己表現であることは認められるにしても、その限界性と誤謬を剔抉する作業は大衆的次元で行なわれなければならないであろう。秋の課題はまさしく日韓—ベトナム闘争を通じてのかかるさまざまな潮流の運動と方針の検証であり、その闘いを通じての全国的学生運動指導部の確立と統一であろう。

先駆性と大衆性の立体的把握
—両者の空洞を埋めるもの—

〝大衆化社会状況〟という一語で以って、現在的なさまざまな歴史的要因や体制内状況の錯綜した関係を代位させるようになってから数年が過ぎ、学生の保守化、政治的アパシイーがいわれるようになったのもここ近年のことである。現在の混沌とした状況を直視する者は決してこのような安易な規定によっては学生層の現実的意識を把握したとはいわないであろう。たしかに言えばそれなりの内実をもった状況は散見できるが、依然とそれは「それなり」の状況であって決して全体的な正しい把握とはなり得ない。しかしながらここでは学生一般大衆意識の分析をすることの必要性と限界とを展開するのであり、具体的分析は他の部門に任せるべきであろう。

学生の民主主義的感覚にヒワイに依存しながら、無媒介的に日共の政治イデオロギーや革命イデオロギーを学生に注入しつづける民青のマヌバーは一見、学生大衆の意識を把握しているように思われるが、単に学生の無関心に便乗したにすぎない彼らの大衆意識の把握と運動論の一次性を端的に暴露しているものである。それは彼らのサークル主義的偏向からもわかるように一般学生が入会したサークルにおいて偶然的にも遭遇したイデオロギーがそのまま主体的に吸収され得ないままの状態でも、活動が続行できる民青フェスティバルや各種祭典のヌスパー以外の何物でもないのである。六月における教養部自治会正副委員長、同学会代議員選挙に見られた彼らの選挙運動は一貫して、敵対するものへの誹謗と中傷で、それを一般学生大衆の「良識」に間接的に投影させるという城を出ないものであった。それ故にこそ、彼らは、一学生をして「民青が政治活動をしたら、選挙してやらないぞ」といわしめる根拠も持つのである。民青における一次的学生大衆意識の認識はまた、彼らの平和運動の堕落した姿に見られるその一次性にもつながっている。

しかしながら以上概観してきた民青の認識論をふまえつつ、学生大衆が一定程度の支持を与えることとの核心的意識構造をとらえかえすという作業に向かわねばならない。それは不可分にも学生戦線における運動論と結びついており、現状認識分析と学生大衆意識の関係は運動を行なう場合の相互補完の関係にあるともいい得るからである。即ち学生運動は一定の学生大衆の意識の把握=指導部の方針の同意を得ることなしには前進しないのであり、一方学生大衆は明確な運動方針と機能的な指導部の存在なくしては、運動の自然発生的段階より一挙に貧弱化していく過程をとらざるを得なくなるのである。（ここでは学生運動がそれ自体一つの自立した物質力として反体制運動を担うことができるか、または労働者農民階級運動の一翼にすぎないのかは問わない）指導部による現状分析（階級情勢分析など）とそこから導かれる明確な指導方針、一方での大衆の主体状況認識（指導部の方針を中心としながらも自己の状況判断とをかみ合わせていく主体的な作業）との相関的有機的な関係こそが運動を推進していくのである。けれどもこの関係が対極化して分解していくとき、客観情勢分析主義、基底体制還元主義、大衆追随主義などの諸偏向を生む結果となり、一方で主体形成主義的偏向を生むことになるだろう。学生運動がそれなりの力量を蓄え、戦後の反戦平和運動の一翼を主体的に担ってきた事実と明確な反体制・革命運動として追求されている現在的な事実を相対化させるとき、あきらかに学生運動が常に学生大衆の即自的感性的反戦平和意識に依存しつつ展開されていることがわかるのである。そしてこの事実こそは学生運動の発展の中でさまざまな形態をとって、その現象を貫く主要な環なのである。

安保闘争後の四分五裂の状況の中で、とりわけ闘争を指導した共産主義者同盟の崩壊については、すでにあらゆる形での総括と批判とが行なわれている。彼らをプチブル急進主義、ブランキスト集団として、闘争を革命的に導き得なかったのは真の前衛の不在であるとし、現在最も主要な課題は前衛組織論に集約されるとする前衛観は、革共同全国委に受けつがれている。その学生組織であるマル学同・革マル派はそのような安保闘争総括の上に立ってプロレタリア的主体形成を、主体形成理論のもとにとらえ、あらたな前衛の確立を指向することによって、民青と三派連合系の解体を一方で押し進めつつ、他方で今なお全学連の存続を主張している。六十年以後の体制側の巧妙なイデオロギー操作と相対的安定経済との中で、完全に眠りこまされた労働者および学生が革命的左翼として蜂起するのにはたしかにそれは必要なことではあり、ブントの犯した轍を二度と踏まれないためにもそれは必要なことである。しかしながら現在個々分散的な反スターリニズム的前衛部分の過度的現像をも機械的に挟殺しようとする事に見られるものは、自己の思想的環をみずから閉じてしまい、観念的、セクト的発想を暴露する以外の何物でもない。先験的に学生意識のプチブル性を規定して、現実と自己の思想との交流を回避してしまう学習会主義、主体形成主義的偏向を犯している。けれども現在の学生戦線の分断の中で、一定程度の張伸が見られる事実からしても、学生大衆に受け入れる要素を持っていることを指摘しなければならない。

学生運動はその層的性格からして、階級的・物質的利害に基づく観点よりもむしろ観念的・正義感的観点から運動に参加する学生によって押し進められる。従って学生意識の反戦・平和への指向をいかに高めて、現状打破の革命的翼に転嫁せしめるかということから問題は提起されなければならない。その事は指導部と学生大衆とがどのような関係にあるのが最も有効であり得るかという先に提起された問題に回帰するのであるが、それは単に客観的情勢分析と正しい方針のみでも、またプロレタリアート的主体のみの存在だけでもない。新たな解決策を要請するものなのである。指導部からの学生運動=革命運動という視点からの運動方針の提起、一方学生大衆からの学生運動=民主主義平和擁護、あるいは非政治的運動という安直な認識のもとの運動への参加とが交差するところは生ずる空洞は、運動の大衆的高揚のあとの空洞として常につきまとい、運動の周期的形態として看過されてきたのであった。そこに見られる限界は客観情勢分析主義と急進的行動主義によって学生大衆一般の離反をまねきつつ、指導部の徹底性が貫徹し得ない状況を作り出し連続的運動が行ない得ないということであった。学内闘争はもとより、政治的闘争にいたるまで、その闘争の主体的契機を設定することから総括（運動の客観的対象

線の分断の中で、一定ていどの伸張が見られる事実からしても、学生大衆に受け入れる要素を持っていることを指摘しなければならない。
学生運動はその層的性格からして、階級的・物質的利害に基づく観点よりもむしろ観念的・正義感的観点から運動に参加する学生によって押し進められる。従って学生意識の反戦・平和への指向をいかに高めて、現状打破の革命的翼に転嫁せしめるかということから問題は提起されなければならない。そのことは指導部と学生大衆とがどのような関係にあるのが最も有効であり得るかという先に提起された問題に回帰するのであるが、それは単に客観的情勢分析と正しい方針のみでも、またプロレ

化）までが一貫して行なわれ得なかった事実はそれを示しているであろう。情勢分析の技術的問題もそれが単に学生大衆を煽動するためのものだけであり運動方針が大衆意識に即自的に対応している段階にとどまっている限り、これはまさしく大衆追随主義的偏向から免れ得ない。一方革命的プロレタリアート創生のみが学生戦線に課せられた問題でなく、あきらかに闘争の階級的位置づけ=立体的把握のもとに学生運動が進められねばならない事は自明であろう。とするならば、学生運動それ自体の自己展開をする中で、労働者階級との連帯を予想するものであるということを提起しつつ、一方の極で自己の主体的変革の契機を物質化するということも現在の学生戦線に要請されねばならないだろう。学生運動は、学生大衆と機能的指導部とが、共同して作りあげていくものであり、運動に参加する主体の周期的部分的代謝によってたえず流動しつつある特殊な状況をふまえながらそれ自体の運動を展開して行く中で、具体的教訓のくみあげと理論の検証がなされていくのである。かかる運動の中で、指導部と学生大衆とは意志の疎通を図り運動の拡大と発展を促してゆくのであり、新たな創造的運動理論組織論を形成して行くのでなければならないだろう。（口）

中華料理の 東園
満席で坐れない場合が時々ありますからその際は10分位店頭でお待ち願わねばならない事があります
営業時間 AM 11.30～PM11.00 （但 P.M2.00～5.00は休憩します）
東一条西入ルP.BOX東構 日曜定休